特別支援学校教員等のバーンアウトと精神健康状態の検討Ⅳ
－教員のコーピングの因子構造に関する検討－

○　坂本　裕（岐阜大学）　　一門惠子（九州ルーテル学院大学）

Ⅰ．目的

教員のコーピングの因子構造を，小学校，中学校，高等学校，特別支援学校の各教員に実施した質問紙調査の結果から検討する。

Ⅱ．方法

時期：2013 年 11 月から 12 月

方法：郵送法にて質問紙を学校毎に配付・回収

対象者：岐阜県教員（小学校 359 名，中学校 284 名，高等学校 402 名，特別支援学校 457 名）

質問項目；五十嵐ら(2003)等を参考に 4 学校種に該当する 22 項目を五件法で構成した。

分析：①一般化された最小２乗法，直接オブリミン法による探索的因子分析。
②共分散構造分析による多母集団分析による確定的因子分析。
③信頼性係数による内的一貫性の検証。

Ⅲ．結果

①　**探索的因子分析**　第 1 因子〈気分転換型〉，第 2 因子〈回避型〉，第 3 因子〈協力要請型〉，第 4 因子〈再挑戦型〉，第 5 因子〈発散型〉が示された。

②　**確定的因子分析**　GFI.863，AGFI.817，RMSEA.045，AIC2645.563 であった。なお，4 校種の教員いずれも各因子と構成項目の標準化推定値はいずれも.1%水準で有意な値であった。

③　**信頼性**　第 1 因子.762，第 2 因子.578，第 3 因子.751，第 4 因子.777，第 5 因子.687，全項目.830 であった。

Ⅳ．考察

教員のコーピングの因子構造として，〈気分転換型〉，〈回避型〉，〈協力要請型〉，〈再挑戦型〉，〈発散型〉の 5 因子が示された。適合度があまり高くないが，標準化推定値や信頼性の値より，今回示された 5 因子をもって今後の検討を進めることの可能性が示唆された。

表１　教員のコーピング項目における直接オブリミン法後の因子パターン

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
＜因子1＞気分転換型					
Q8：物事をよい方向に考える	**.672**	−.090	−.004	.216	−.059
Q14：くよくよしないように心がける	**.609**	.045	−.054	.300	−.037
Q13：別の楽しいことを考える	**.578**	.194	.071	−.033	.117
Q7：仕事以外のこと（趣味やスポーツ）に取り組む	**.562**	.072	.033	−.149	.084
Q10：行事や旅行に出かける	**.409**	.019	.099	−.125	.335
＜因子2＞回避型					
Q6：その問題を避け，忘れようとする	−.040	**.877**	−.027	−.121	−.067
Q3：仕方がなかったと割り切る	.183	**.466**	.027	.057	−.040
Q19：難しい問題をあとまわしにする	−.053	**.422**	−.003	.047	.108
＜因子3＞協力要請型					
Q4：管理職や同僚に，個人的に相談する	−.047	.008	**.812**	.032	−.069
Q2：誰かに話を聞いてもらう	.036	−.054	**.732**	−.055	.063
Q11：誰かに頼んで，問題解決に協力してもらう	−.010	.040	**.579**	.163	.035
＜因子4＞再挑戦型					
Q15：問題点をはじめから見直す	.033	−.098	.020	**.725**	.033
Q22：他にやり方がないか，自分で工夫する	.022	−.042	−.041	**.659**	.195
Q16：話し合って，妥協できるところを探す	−.001	.061	.118	**.605**	−.046
Q12：過去の経験に照らしてみる	−.028	.035	.120	**.598**	−.055
Q18：あせらないように心がける	.284	.089	−.047	**.460**	.109
＜因子5＞発散型					
Q21：食べたいものをたくさん食べる	−.071	.050	.033	.063	**.754**
Q20：たくさん眠るようにする	.013	.026	−.034	.071	**.653**
Q17：ショッピングに出かける	.201	−.001	.183	−.055	**.447**